



ショートコメント

★★★

Data 2025-22

監督・脚本：ミシェル・フランコ

出演：ジェシカ・チャステイン／ピーター・サースガード／メリット・ウェヴァー／ブルック・ティンバー／エルシー・フィッシャー／ジェシカ・ハーパー

あの歌を憶えている

2023年／アメリカ・メキシコ映画
配給：セテラ・インターナショナル／103分

2025（令和7）年2月27日鑑賞

テアトル梅田

みどころ

若年性認知症をテーマにした名作は多いが、“忘れたくない記憶”を失っていく恐怖は大変なもの。他方、少女時代に父親から受けた性的虐待は、“忘れたくても忘れられない記憶”だ。そんな対立する「MEMORY」を持つ男女が同窓会で再会すると・・・？

原題の『MEMORY』と邦題の『あの歌を憶えている』は同じテーマを別の視点から表現したものだが、そんな男女の“再会”と“引き離し”のストーリーは切なく胸を打つ。しかして、あっと驚くラストの結末を、あなたはどう評価？

— * — *

◆『女神の見えざる手』（16年）（『シネマ41』204頁）で観たハリウッド女優ジェシカ・チャステインは、あの特徴ある顔立ちが印象的（？）な女優。また、メキシコの俊英ミシェル・フランコ監督は、『或る終焉』（15年）（『シネマ38』未掲載）、『ニューオーダー』（20年）（『シネマ51』147頁）で有名だ。他方、私は全然知らなかったが、本作に主演したピーター・サースガードは、本作の演技で第80回ヴェネチア国際映画祭コンペティション部門最優秀男優賞を受賞したそうだから、本作は必見！

◆チラシに見る本作のストーリーは、次のとおりだ。

ソーシャルワーカーとして働き、13歳の娘とNYで暮らすシルヴィア。若年性認知症による記憶障害を抱えるソール。それまで接点もなかったふたりが、高校の同窓会で出会う。家族に頼まれ、ソールの面倒を見るようになるシルヴィアだったが、穏やかで優しい人柄と、抗えない運命を与えられた哀しみに触れる中で、彼に惹かれていく。だが、彼女もまた過去の傷を秘めていた。

◆主人公を若年性認知症の人物に設定した映画は、ソン・イェジンが主演した韓国映画『私の頭の中の消しゴム』（04年）（『シネマ9』137頁）や、渡辺謙が主演した『明日の記憶』（06年）（『シネマ10』172頁）等たくさんある。本作では、それを患っている主人公・ソ

ール（ピーター・サースガード）が、同窓会で出会ったシルヴィア（ジェシカ・チャステイン）の後を追いかけていくところからストーリーが始まっていく。

他方、シルヴィアは、今でこそ13歳の娘アナ（ブルック・ティンバー）から愛されているしっかり者のシングルマザーだが、シルヴィアの母親サマンサ（ジェシカ・ハーパー）や妹オリヴィア（メリット・ウェヴァー）との会話を聞いていると、少女の頃の彼女は切実な問題を抱えていたらしい。もっとも、それが明かされるのはラスト近くになってからだから、本作導入部から中盤にかけてのストーリー展開には少しイライラ？

◆本作のテーマは、若年性認知症によって、“忘れたくない記憶”を失っていかようとしている男・ソールと、少女の頃の忌まわしい“忘れたいけれども忘れられない記憶”を今なお引きずっている女シルヴィアが導かれるように出会い、支え合い、やがて新たな人生と希望を見つけていくというもの。したがって、そんな本作の原題は『MEMORY』だ。「MEMORY」と聞けば私は、劇団四季のミュージカル『キャッツ』で、老いたメス猫のグリザベラが歌うバラードの名曲「メモリー」を思い出すが、本作のストーリー展開をみれば、その原題はピッタリだ。

他方、本作には私もよく知っている名曲「青い影」がさまざまなシーンで再三繰り返し使われている。本作の邦題『あの歌を憶えている』は2人のさまざまな「MEMORY」の中で共通する、そんな名曲に焦点を当てたものだが、少しわかりにくい感じも・・・。

◆アメリカでは日本以上にアルコール依存症や薬物依存症の問題が深刻だし、少女時代に父親から性的暴行を受けたという、極めて深刻な問題も多い。そして、本作でシルヴィアが抱えている“忘れたくても忘れられない記憶(MEMORY)”がまさにそれだったことが、本作後半になってはじめて明らかにされるので、それに注目！もちろん、父親による娘への性的虐待を当の父親やその妻が認めないのは当然。妹のオリヴィアもそれは姉の思い込みだと考えていたようだが、さてその真相は・・・？

◆そんな風に、本作後半からはシルヴィアの“忘れたくても忘れられない記憶(MEMORY)”が急浮上してくるのに対し、ソールの方は、遂に施設に入れられ、牢獄のような生活に陥っていくので、それに注目！そのため、同窓会で再会した後、一時期は互いに寄り添い、良き関係を維持していたソールとシルヴィアだったが、今は完全に切り離され、会うこともままならなくなっていたが、さて本作ラストでは・・・？

本作についてのある新聞紙評は、その点を「後味の悪いことの多い彼の作品では、珍しく希望的な幕切れを迎える」と書いていた。「希望的」と言えるかどうか、私は懐疑的だが、本作の結末が“あっと驚くもの”になっていることは間違いないので、それに注目！

2025（令和7）年3月4日記